

---

---

## 《論 文》

# 数の恐怖—— ジャック・ロンドンの短篇小説に関する一考察

岡 崎 清

---

### 要 旨

ジャック・ロンドンの短篇小説の主人公には共通した傾向がみられる。それは「数」を数える行為に異常なほど執着を示す点である。数える行為（たとえば反復される工場労働の動作回数）によって主人公の未来が予測され、産業社会の機械人間におとめられることを防いだ主人公が「背教者」のジョニーである。そこにはジョニーの意志が明確に存在する。しかし、他の主人公たちは「数」に関連した行為（時計をみる、気温を測る、距離、速度を計るなど）を意志行為として示すものの、読者あるいは全知の作者ロンドンの視点からすれば、無意識的行為に反転してみえて／みせてしまう。定型化された社会規範のもとで示す意志行為が、じつは意志の作用によらない反復にすぎないことをロンドンの主人公の多くが物語る。

キーワード：意志、ロボット、産業化、恐怖、数

### はじめに

本稿は、十九世紀末から二十世紀初頭にかけてアメリカ合衆国の世紀転換期を代表する作家のひとりと目される Jack London の短篇小説を取り上げ、ロンドンの短篇に共通してみることのできるひとつの傾向を指摘することにある。ロンドンの作品には「数 (number)」を叙述する文がじつに多い。数の叙述は何を意味するのか。アメリカ自然主義小説を論じている折島正司は、ロンドンの作品にみられる作者の「分身たち」が「衣類や背の高さや身の回りの小道具など、徹頭徹尾計量と計測可能な外観的で物理的な特性」<sup>1)</sup>をもつと論じている。折島は登場人物の行動／運動を「人工的、文化的に定型化され」とみなす。その運動は「訓練と学習によって身につけられた知識によってささえられ、連続体を部分に分解するテクノロジーの所産としてあらわれる」らしい(71)。折島は物語の結末で登場人物が運動を「停止」することにより「敗北」と結論づけた。

折島のいう「計量と計測可能な外観」を本稿でも確認しつつ、その意味を探ることとしたい。

## I. 繰り返す運動または回数としての数の恐怖

短篇“The Apostate”（「背教者」）は、資本主義社会で搾取にあえぐ少年工場労働者の苦しみを描かれた作品であるが、主人公の少年は次のようにつぶやいている。

“I’m plum’ tired out. What makes me tired? Moves. I’ve ben movin’ ever since I was born. I’m tired of movin’, an’ I ain’t goin’ to move any more. Remember when I worked in the glass-house? I used to do three hundred dozen a day. Now I reckon I made about ten different moves to each bottle. That’s thirty-six thousan’ moves a day. Ten days, three hundred an’ sixty thousan’ moves. Chuck out the eighty thousan’ —.” [H]e [Johnny] [with the complacent beneficence of a philanthropist — “Chuck out the eighty thousan’ that leaves a million moves a month — twelve million a year.”<sup>2)</sup>

「僕はすっかり疲れちゃったんだよ。何がそうさせたかのかって？動きだよ。僕は生まれてからこのかた、ずっと動きっぱなしだからな。もう動くのに飽きちゃったのさ。だからもうこれ以上動かないんだ。僕がガラス工場で働いていた時のこと覚えてる？あのときゃ、ずっと一日三百ダースやったんだよ。すると、一日に三万六千の動きとなる。十日だと、三十六万だ。一カ月だと、百八万だ。八万なんて面倒だ」彼は、博愛家がほどこしをする時の自己満足の体で言った。「八万を切り捨てると、月に百万の動きが残るとのことだ…一年にすると、千二百万になる」<sup>3)</sup>

折島は「主人公には、ものごとはすべて計測できる技術的な問題」であり、「動く生命体が動く非生命体のように動く傾向が高い。人間が機械のように動く傾向が高い」(5)と指摘している。物語は、主人公がやがて嫌気をさし、工場も家も飛び出して列車に無賃乗車して乗り込む場面で結末をむかえる。工場での彼の運動は停止するが、移動をもって運動は続く。移動先で無限に反復する運動を主人公が繰り返すのか否か、結末ではホーボーを決意しているとも受けとめられるため、それを否定した書き方と読める。ロボット化された人間への否定を作者のロンドンが意図しているように思われる。かりにホーボーというかたちでしかオルタナティブを示していないせよ、工場から逃げ出すことを敗北とはみなせない。

「背教者」の主人公の意識を上でみたが、彼の家庭における母親のせりふ、すなわち周囲の彼に対する眼差しはどのようなものか。母親が「顔を洗え」と苦言を述べている場面があるが、数の問題に関連してとりあげてみたい。母親の苦言は、清潔さを保つようにとのことであるが、

それは世紀転換期にもたらした移民の大流入におけるアメリカ人のひとつの課題でもあった。

シアーズ・ローバックのような当時新しく起業した通信販売のアイテムの中にも石鹼その他清潔さを保つ商品が目白押しである。清潔になることが階級上昇志向に結びつくからでもある。

また、中産階級は意識して清潔さを保ち、労働者階級と区別をはかるといった見目の境界線づくりに励んでいたのである。

“You [Johnny] might wash yourself wunst a day without bein’ told,” his mother complained. (1113)

「言われなくたって一日に一度は顔を洗ってもいいのにねえ」と母親はぶつくさ言った。

しかし、主人公ジョニーは母親の苦言など意に介さない。彼はそうして清潔を保ち、いかに優秀な工員になろうとも、行く末は冒頭の引用で示したように階級上昇を不可能と直感した少年の心が未来を予想して反発を示すのである。

次に“Love of Life”（「命への愛」）をみてみよう。

He unwrapped his pack and the first thing he did was to count his matches. There were sixty-seven. He countered them three times to make sure.... (925)

彼は荷物をほだき、最初にしたことといえばマッチを数えることであった。六十七本あった。三度数えて確かめた。

金鉱を見つけ出そうとアラスカに到着して最初にした主人公の行為は、マッチを数えることであった。極北の地でマッチ自体は不可欠な物質ではあるが、わざわざ本数を示し、三度も数えるという行為を書き込んだ作者ロンドンが、主人公に数えることで安心感を与える人物をつくりだしている。また、“The One Thousand Dozen”（「千ダースの卵」）にも数の問題が作品タイトルをみればわかるとおり、テーマにかかわる。主人公はアラスカで金鉱探しの連中に卵を売って一旗あげようとたくらむが、卵が腐り、負債をかかえて自殺する。

He [Rasmussen] figured briefly and to the point, and the adventure became iridescent-hued, splendid. That eggs would sell at Dawson for five dollars a dozen was a safe working premise. Whence it was

incontrovertible that one thousand dozen would bring, in the Golden Metropolis, five thousand dollars.(632)

彼のした計算は簡単なものだったが、正確で、その結果、冒険は七色に輝いてみえた。ドースンで卵が一ダース五ドルで売れるって考えて、まずまちがいない。だから、千ダースがあの黄金の都で、五千ドルになるっていうのにも議論の余地がない。(辻井・大矢訳)

「命への愛」も「千ダースの卵」も数える行為によって自己を位置付けている。しかし、見込みがはずれて失敗する物語だ。後者では千ダースの卵の数が結末では恐怖に転化するのである。

本節の最後にロンドンのボクシング短編小説である“A Piece of Stake”（「一切れのステーキ」）をみてみよう。

Well, a man had only so many fights in him, to begin with. It was the iron law of the game. One man might have a hundred hard fights in him, another man only twenty; each according to the make of him and the quality of his fibre, had a definite number, and, when he had fought them, he was done. Yes, he had had more fights in him than most of them, and he had far more than his share of the hard, gruelling fights — the kind that worked the heart and lungs to bursting, that took the elastic out of the arteries and made hard knots of muscle out of the Youth's sleek suppleness, that wore out nerve and stamina and made brain and bones weary from excess of effort and endurance over-wrought. (1633-34)

そうだ、第一、一人の人間としてそれだけの回数しか試合ができないようにきまっているのだ。それが試合の鉄則というものだった。ある人間は百回激しい試合をすることが出来ただろうし、またある人間は二十回しか出来なかったかもしれないのだ。めいめい、その体格と素質に応じて限られた回数しか出来ず、それだけ闘った時終りになるのだ。そういえば、俺は大抵の連中よりその回数が多かったし、激しい、体力をすり減らす闘いを与えられた回数以上にやったのだ。(西崎・鍋島訳)

老いばれボクサーの主人公トム・キングは、一人の人間が一生のうちで試合可能なボクシングの「回数」について考えに耽る。「体格と素質に応じて限られた回数しか出来ず、それだけ闘っ

た時終り」になると考え、自己の回数をこなし、闘いに終止符をうつことになる。すなわち、負けた後、リングを去ることが暗示されている。「背教者」の少年主人公ジョニーを思い起こすならば、少年ジョニーはいわばトム・キングになることを避けたのである。

## Ⅱ. 気温としての数の恐怖

ロンドンの短篇のなかでも最も知られた作品“To Build a Fire”（「焚き火」）は、極北の地で冷凍死する男の物語である。

The trouble with him was that he was without imagination. He was quick and alert in the things of life, but only in the things, and not in the significances. Fifty degrees below zero meant eighty-odd degrees of frost. Such fact impressed him as being cold and uncomfortable, and that was all. It did not lead him to meditate upon his frailty as a creature of temperature, and upon man's frailty in general, able only to live within certain narrow limits of heat and cold; and from there on it didn't lead him to the conjectural field of immortality and man's place in the universe. Fifty degrees below zero stood for a bite of frost that hurt and that must be guarded against by the use of mittens, ear-flaps, warm moccasins, and thick socks. Fifty degrees below was to him just precisely fifty degrees below zero. That there should be anything more to it than that never entered his head. (1302)

この男の難点は、想像力のないことだった。日常生活一般では敏捷で抜け目がなかったが、それは物事のうわべだけのことであって、意味のあることについてはそうではなかったのだ。零下（華氏でマイナス）五十度と言えば、氷点下八十何度ということだ。そうした事実にしても、この男には寒くて不快と感じる、それだけのことだった。気温に左右される生き物としての自分のもろさや、ある限られた暑さ寒さの範囲内ではか生きられない人間のもろさ全般についてまで、考えが及ぶことはなかった。（辻井・大矢訳）

ここでも前節でとりあげた「背教者」の主人公とは対照的な結末である。折島のいう「敗北」が認められる。すなわち、死＝運動の停止である。主人公は、気温という数値で示される数の本質的な意味を問うことを剥奪されてきたとも読める。大人である主人公は、「背教者」の少

年とは異なり、所属する社会／組織のなかでうまく生きてきたことが窺えることから、極北の地に向かう以前に居住していた彼の組織／社会は、主人公に想像力をもたせることを必要としなかった。個人主体で考えれば、彼は想像力をもとうとする自覚的意志をもたなかった。組織／社会が、もし彼に想像力をもたせるならば、工場を飛び出した少年のような姿にならないか。それはシステムを運営する側の自殺行為にはかならないだろう。この作品は資本主義のシステムのもとで労働者が安住し、無自覚なロボットと化する敗北の姿の物語として読むことができる。主人公が極北の自然に放り出されたとき、彼の所属していたシステムの保護をもらは受けることはできなかった。彼はオールタナティブな生き方を模索せず、批判的精神を持たずに、それまでの組織／社会をア・プリオリにみていたことの結末がここにある。

### Ⅲ. 時計、時間、距離としての数の恐怖

前節で紹介した「焚き火」の主人公は気温の数値の意味を知らぬまま、酷寒の恐怖に怯えて死に絶えるが、彼はまたそれまでの組織／社会に安住していたときの何気ない動作をおこなう。それが時計をみる行為だ。

It was a steep bank, and he paused for breath at the top, excusing the act to himself by looking at his watch. (1301)

勾配の急な土手を上まで登りきると、男は時計をみるのにかこつけて、立ち止まってひと息ついた。(辻井・大矢訳)

At half-past twelve, to the minute, he arrived at the forks of the creek. (1305)

十二時半、一分と狂わずきっかりに、男はクリークの分岐点に着いた。  
(辻井・大矢訳)

主人公の時計をみる行為は、極北の地では意味をなさない。約束事や時間まつわる制約事など何ひとつ無いにもかかわらず、彼は時計をみるのである。主人公にとって時間どおりに動くことが、彼の所属していた前システムのもとでは、いかに重要な条件であったのかが窺える。

極北の地でそれを繰り返すことは時刻に示された数への恐怖や強迫観念が強いことの証左といえるだろう。次の引用も時間と速度への執拗な関心が主人公の意識に棲みついていることを示している。

This was Henderson Creek, and he knew he was ten miles from the forks.

He looked at his watch. It was ten o'clock. He was making four miles an hour, and he calculated that he would arrive at the forks at half-past twelve. (1303-04)

これがヘンダーソン・クリークで、彼はあの分岐点から十マイルのところまで来ているのを知った。時計をみってみる。十時だ。時速四マイルまで来たわけだから、この調子で行くと十二時半には分岐点に着くだろう。  
(辻井・大矢訳)

主人公にとって時間どおりに正確に動くことが前システムの条件であったのだろう。今ひとりで生きている主人公は、前システムの時間装置を極北の地で踏襲し、彼のアイデンティティを維持しようとする。しかし、読者や作者には、それがいかに意味をなさないものであるかは言うまでもないだろう。

ロンドンの極北ものを扱ったもうひとつの代表的な短篇“Love of Life”(「命への愛」)も「焚き火」同様に主人公がしきりに時計をみている。以下に三例を示す。

He built a fire and warmed himself by drinking quarts of hot water,...The last thing he did was to see that his matches were dry and to wind his watch. (928)

彼は火をおこし、何クォートもお湯を飲んで身体を暖めた。…寝る前に最後にしたことといえば、マッチが乾いているかを確認することと、腕時計のねじを巻くことであった。

He did not move for a long while; then he rolled over his side, wound his watch, and lay there until morning. (931)

彼はしばらく身動きしなかった。それから横にころがり、腕時計のねじを巻き、朝までそこに横になっていた。

He had lost his hat somewhere,...but the matches against his chest were safe and dry inside the tobacco pouch and oil paper. He looked at his watch. It marked eleven o'clock and was still running. Evidently he had kept it wound. (934)

帽子はどこかでなくしてしまっていた…けれども胸にしまいこんだマツチはちゃんと乾いた状態で、煙草入れの油紙の中にあった。彼は腕時計をみた。十一時を指しており、まだ時計は動いていた。どうやらねじを巻き続けていたようだった。(辻井・大矢訳)

「命への愛」の主人公も「焚き火」の男同様に、都会からゴールドラッシュ成金をめざしてアラスカに入りこむ。両者とも遭難者になるものの、「命への愛」の主人公は幸運にも助けられ、船でサンフランシスコに戻される場面で物語が閉じられる。結末は異なるとはいえ、両者にみられる時刻を意識するこのような強迫観念に近い姿は、規則どおりに生きることを強いる前システムから抜け出せないことを意味し、それが悲劇を生む原因となる。救出された男の話も船の中で異常な食行爲を示し、明るい結末ではない。主人公には悲劇を生む原因は自覚されず、全知の作者とそれを分け合う読書のみが知ることになる。

他の短篇にも時計にまつわる何気ない文章が目につく。ロンドン最晩年の短篇“The Red One”（「赤い窪み」）にも、都会を離れて南洋のジャングルを探検する主人公が、正体不明の不気味な音を耳にしたときに腕時計をみる。

THERE it was! The abrupt liberation of sound, as he timed it with his watch, Bassett likened to the trump of an archangel...For the thousandth time vainly he tried to analyze the tone-quality of the enormous peal that dominated the land far into the strongholds of the surrounding tribes. (2296)

またもや！突然その音がきこえてくると、彼は腕時計をみて時間を計った。バセットはその音を大天使の吹くラッパの[終末を意味する]音になぞらえた。…何度もその巨大な響きを伴った音の性質を分析してみたが、わからずじまいだった。その音は周囲の部族の住みかにまで遠く及んで、あたりの土地を支配している音であった。

科学者としての主人公は、謎の物体に、あくまでも科学的／理性的に、いわば観察対象として迫ろうとする。あくまでも「分析」という立場を崩さない。西洋近代文明の科学的精神を持ち込む主人公の結末は、謎の正体を知ることになるが、読者にはその内実を知らされない。ただ巨大な隕石の落下物によってできた窪みと仮定され、そこから生じた自然現象による不可解な音というほかは読者にはわからない。腕時計で音の震動時間を計測し、正体を突きとめた主人公は、約束どおり部族の長に自らの首を差し出して物語が閉じる。長が赤い窪みの正体を知



りたければ教えてやるが、そのかわり首をくれと言ったためである。

この作品は、腕時計の計測による勝利ではなく、計測しても本質をつかむことができない近代理性の無力さや限界性を示した作品と読める。

#### IV. 人間が機械になること

これまでみてきたように、数にまつわる主体の意識が、自己を包囲する組織／社会システムへの抵抗として主人公に自覚的に表象された作品が「背教者」である。しかし他の作品の主人公たちは、数えることをアイデンティティとし、システム内の価値を追認するか、無自覚なままで生きることになる。その結末はすでにみたとおりである。ロンドンが、優秀な工員ジョニーを次のように描き、システムに包囲されているさまを「機械」になった人間として描く。

後に彼は機械になることを拒否して家出することは、すでに述べたとおりである。

He [Johnny] worked mechanically....From the perfect worker he had evolved into the perfect machine. (1115)

彼は機械的に働いた。…完璧な労働者から完璧な機械へと進化していったのだ。

[H]e sat always in the one place, beyond the reach of daylight, a gas-jet flaring over him, himself part of mechanism. (1120)

彼はいつも一箇所に座ったきりだった。そこは昼の陽光が届かず、ガス灯のあかりが頭上でゆらめいていた。彼自身が機械の一部であった。

[T]he clay of him had been moulded by the mills into the perfect machine. (1124)

彼の身体は工場によって完璧な機械につくりあげられていた。

There was no joyousness in life for him. The procession of the days he never saw. The nights he slept away in twitching unconsciousness. The rest of the time he worked, and his consciousness was machine consciousness. Outside this his mind was a blank. (1124)

彼には人生の楽しみなどなかった。過ぎ行く日々なことなどに気をとめたりしなかった。夜の眠りは体をひきつりながら無意識の中で過ぎていった。寝ていない意識している時間の中では働き、その意識は機械の意識であった。

At times his mind wandered farther afield, and he plodded on, a mere automaton,.... (931)

時々彼の心は遠くへさまよった。とぼとぼ歩き、まるで単なる自動機械人形のように…。

「背教者」は1906年に出版された。自動車メーカーのフォード社が大量生産の組み立て式生産を開始したのは1913年である。また、チャプリンが『モダン・タイムズ』で機械化された生産方式に対して痛烈な批判を試みたのは1930年代である。ジャック・ロンドンが近代工場の生産システムが人間を機械化していくさまを、二十世紀初頭のシステムがまだ確立されていない時代にいち早く予見したアメリカ作家として位置づけてよいだろう。タイトルは、近代資本主義生産システムを心奉る側からみて、その教えに背く者と読める。

次に“South of the Slot”（「スロットの南側」）をとりあげる。サンフランシスコ三番街を基準にその南地区は、労働者階級の住む地区である。主人公のドラモンドはその地区に住み、肉体を売り物にするボクサーでもある。

He [Freddie Drummond] was noted as a boxer, but he was regarded as an automaton, with the inhuman precision of a machine judging distance and timing blows, guarding, blocking, and stalling. He was rarely punished himself, while he rarely punished an opponent. He was too clever and too controlled to permit himself to put a pound more weight into a punch than he intended. (1583)

彼はボクサーとして有名だったが、自動機械として見なされ、機械の非人間的な正確さで距離を計り、ブローの時宜を心得、ガードし、ブロックし、時間を稼いだのだった。自分がひどい目にあうことはめったになかったし、また、相手に強打を浴びせるということもなかった。きわめて如才がなく、落ち着いていたから、意図しているよりも一ポンド以上の体重をパンチにのせるようなことはなかった。（辻井訳）

計算しつくされたボクシングの技を披露する主人公は、意識的に自己を機械につくりあげている。ここで機械になることの三つの様態を整理したい。①自らの意志で機械になり、あるいはなる振りをして、戦略的な生き方を追求すること、②機械にされている自己を意識しないこと、③機械にされることを意識し、抵抗すること。ジャック・ロンドン是这样した三種の人間が機械になる／される様態を描いている。

いずれにせよ、人間が機械になることの表象は、機械のように規則的な運動を反復し、何かしらの対象を計測する行為に集約されている。

## V. 結びにかえて — 数を数える行為と自動機械になることの親密性

再び「背教者」に戻ろう。以下の引用は、三人称小説として作者が主人公の様態を叙述した場面である。注目されるのは主人公自身の内面は語られておらず、外部から、すなわち作者の視点をとおして語られている点にある。

In ten hours three hundred dozen bottles passed through his hands. This meant that he had attained machine-like perfection. (1121)

十時間で三百ダースの瓶が彼の手から通過した。これは機械のような完璧さを彼が身につけていたということの意味していた。

フィクションという虚構の物語では、作者と登場人物との距離が問題となる。とりわけ三人称小説の場合は、作者が客観性を装いながら全知の語りを用いる。「背教者」では、作者は主人公と抑制の効いた距離を保ちながら、あくまでも外側から主人公を眺める視点をとる。しかし、作者の手による創造的作品としての小説は、とくに主人公に対して、そうあって欲しいという願望と欲しくないという願望のどちらかに収斂されうる。「背教者」の場合、外側からの客観描写は、機械になって欲しくないとする作者の願望が示され、抑制の効いた客観描写をもつが、最後には本稿冒頭部の引用で示したように、主人公自身の内面の吐露に切り替えて、機械になることの拒否を主人公自らに言わせるのである。

本稿の最後に「千ダースの卵」にみられるを数える行為と自動機械になることの間を考察したい。なぜなら以下の引用に両者の関係を解き明かすロジックが明示されているからである。

In the foreground of his [Rasmunsen's] consciousness was Dawson, in the background his thousand dozen eggs, and midway between the two his ego fluttered, striving alway [sic] to draw

them together to a glittering golden point. This golden point was the five thousand dollars, the consummation of the idea and the point of departure for whatever new idea might present itself. For the rest, he was a mere automaton. (641)

意識の前のほうにドースンがあり、後ろのほうに千ダースの卵がある。その二つの間で彼のエゴが、この二つを黄金に輝く点で結びつけようと、鳥のように必死に羽根を羽ばたかせていた。この黄金の点が五千ドルで、彼が取りつかれたものの終着点であり、また、何かあらたに思いつくことがあったとしたら、その出発点となるべきところなのだ。これ以外のことについては、完全な自動仕掛けの人形だった。(辻井・大矢訳)

主人公は、卵の数とその数をもたらす金銭としての数にのみ意識が前景化されている。その他の事柄については彼の意識にのぼらない。自動機械になりながら、人間としての唯一の意識が数を数える行為であるという。しかし、これは主人公の立場から内面心理を作者がすくいあげた表現である。読者（あるいは客観的立場を装う作者でさえ）は、主人公が数を数える行為を彼の意識とはまったく逆に無意識的行為として読む（作者が読ませる）ことができないか。つまり主人公の意識と無意識が数を数える行為のなかで反転してはいないだろうか。すくなくとも主人公にとって卵の数とその金銭換算をする行為は、ごく自然な何の疑問も持たない行為に思われる。このことはすでに述べた「命への愛」の主人公が偏執的に腕時計をみたり、そのねじを巻く行為と同一線上にないだろうか。意識的自覚的に時計をみる行為は、主人公が自己を意識する場面におこなわれ、そのことによって自己の存在や意識につながる自己本体を確認しているかのようである。ところがその行為そのものは、読者には主人公がそれまで身に付けた癖と言ってもいいような性質に映るのである。ロンドンのロジックはここにある。本稿で取り上げた他の作品、「赤い窪み」の主人公もまた、意識的自覚的に腕時計をみて謎の音が森の中で響く時間を計る。その行為は、主人公が身に付けた癖の所作として読者には無意識的行為に映るのである。

折島は、ロンドンの「分身」たちが、自動機械と化すその運動を「人工的、文化的に定型化され」たものと規定した。自動機械の対極をなす意識的自覚的行為が「無意識」的行為に反転するとき、意識（数を数える）＋無意識（自動機械人間化する）の人間の総体が、無意識＋無意識の人間に化け、近代から今日まで我々が称揚してきた個の確立に不可欠な自我そのものが、じつは、まったく自我のない人間、あるいは折島のいう「人工的、文化的に定型化され」たコードの中にアイデンティティが回収されてしまう人間の危険性を二十世紀初頭のアメリカ作家ジャック・ロンドンが指摘している。この意味でロンドンを読む価値は今も消えていない。ロ

ンドンは、ときに自らもその危険を文筆稼業のなかで戦略的に演じ（どんなときでも一日千語の執筆活動を続けたことはよく知られている）、自らを創作機械人間にして、当時の文学マーケットにのせるべく玉石混交の作品を書いた作家でもあった。主人公がどこまで作者ロンドンの分身であるかについては別稿に譲るとしても、ひょっとしたら極北の地でマッチの本数を数えているのは、あるいは腕時計をみて計算をたてているのはロンドンその人であったのかもしれない。

- 註 1) 折島正司『機械の停止 アメリカ自然主義小説の運動／時間／知覚』（松柏社、2000）、p.67。折島からの引用は全て本書により、以下必要に応じて（ ）内にページ数を示す。
- 2) London, Jack. *The Complete Short Stories of Jack London*. Edited by Earl Labor, Robert C. Leits III, and I. Milo Shepard. 3 vols. (Stanford, Calif.: Stanford University Press, 1993), p.1127. ロンドンの短篇の引用は全て本書により、以下（ ）内にページ数を示す。
- 3) ジャック・ロンドン『ジャック・ロンドン大予言』辻井栄滋訳（晶文社、1986）pp.245-46。なお、これよりロンドンの短篇の和訳は引用末尾に訳者名を記す。出典については引用文献を参照されたい。また、訳者名の無いものは拙訳である。

## 引 用

- London, Jack. *The Complete Short Stories of Jack London*. Edited by Earl Labor, Robert C. Leits III, and I. Milo Shepard. 3 vols. Stanford, Calif.: Stanford University Press, 1993.
- . *Jack London Novels & Stories*. Edited by Donald Pizer. New York: Literary Classics of the United States (The Library of America), 1982.
- 折島正司『機械の停止 アメリカ自然主義小説の運動／時間／知覚』松柏社、2000。
- ジャック・ロンドン『ジャック・ロンドン大予言』辻井栄滋訳 晶文社、1986。
- 『極北の地にて』辻井栄滋・大矢健訳 新樹社、1996。
- 『ジャック・ロンドン 白い沈黙他短編集・野性の呼び声』鍋島能弘・西崎一郎・森岡栄訳（『現代アメリカ文学全集』第14巻）荒地出版社、1958。

## 参考文献

- London, Jack. "The Apostate" and "The Strength of the Strong" by Jack London. Edited with Notes by Akio Oura. Tokyo: Chuo University Press, 1973.
- Reesman, Jeanne Campbell. *Jack London: A Study of Short Fiction*. New York: Twayne, 1999.
- Tichi, Cecelia. *Shifting Gears: Technology, Literature, Culture in Modernist America*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1987.
- 大浦暁生監修 ジャック・ロンドン研究会編『ジャック・ロンドン』三友社、1989。
- ジャック・ロンドン『ジャック・ロンドン アメリカ残酷物語』辻井栄滋・森孝晴訳 新樹社、1999。

The Fear of Numbers: A Note on Jack London's Short Stories

OKAZAKI, Kiyoshi

Abstract

Protagonists of Jack London's short stories have common character. A common thread which runs through London's heroes or anti-heroes is concerned with the fear of numbers or counting the number of their world. This paper examines "The One Thousand Death", "Love of Life", "The Appostate", "To Build a Fire", "South of the Slot", "A Piece of Stake", and "The Red One." The industrial society in the early 20th century described by London makes protagonists become automatons without will. Among them Johnny only escapes and survives from the world that confines them.

Key words: will, automaton, industrialization, fear, numbers

(おかざき きよし 本学人文学部助教授 アメリカ文学専攻)